特定非営利活動法人 リアライズ

リアルライフNEWS

2008年6月《創刊号》

2008年４月1日、泉大津市に自立生活センターが誕生した…。

泉大津市など泉州地域を舞台に数々のドラマが生まれるであろう…。

その始まりは…そう…ここリアライズである。

みなさんこんにちは！**私たちＮＰＯ法人リアライズ**は２００８年４月から泉大津市で活動を開始しました！！設立に向けて支援してくださった皆様には心より感謝を申しあげます。

現在は、事業開始直後ということもあり、色々と慌ただしい日々が続いています。

思い起こせば2007年4月、三井がリアライズを立ち上げる決意をしてはや1年・・・・

えぬぴーおー　ほうじん　　きせき
NPO法人リアライズの軌跡

■　はじめに

２００７年４月、三井孝夫（骨形成不全／３０）・高橋翼（健常者／３０）の二人で活動を開始し、『ＮＰＯ法人リアライズ』設立準備会を立ち上げ、自立生活センターと介助派遣センターの設立を視野に入れ、ＮＰＯ法人格取得を目指し準備等を行ってきました。

まず、初めに大阪ＮＰＯ情報センターでＮＰＯ設立のための講習会を受講しました。そこの職員さんに、「大変な作業だけど、自分たちで書類を作って想いを高めて下さい。」と言われました。そして、「出来るところまで自分たちの力で作ってみようや！」と決心しました。しかし、思った以上に準備は大変でした。

難関は定款（法人の決まり事）、事業計画の作成でした。特定非営利活動促進法（ＮＰＯの決まりを書いた法律）を基に自分たちで自分たちのカラーの法人にするための定款づくりは、将来のリアライズの未来図を思い描きながら楽しんだ部分もありますが、とにかく調べることが多く、かなりの時間を費やしました。法務省への手続きや、居宅介護の申請や手続きについては、社会保険労務士である濱村さんの多大な協力もあり、無事に終えることが出来ました。

濱村さんには、この場を借りてお礼を申し上げます。

そして2007年10月、川本（脳性マヒ／23）が参加したことで、より実現に近づいてきました。自立生活センター協議会で定められている、代表、事務局長を当事者が担うという点です。しかし、障害当事者2人と健常者スタッフ1人では、自立生活センターと、介助派遣を両立することは明らかに難しく、介助派遣の事務と介助を高橋のみが中心に

なって担うことになれば、心身ともに潰れてしまうのは明らかで、介助派遣を担う健常者スタッフがあと1人参入するまで、活動開始時期を遅らせるしかありませんでした。

しかし、2007年12月、に三井の大学の後輩にあたる、山本啓司（健常者／23）がリアライズに参加することを決意し、2月末に前職の特別養護老人ホームを退職し、3月よりメンバーにとなる決意をしてくれたことにより、予定通り2008年4月に泉大津で活動を開始出来る目途がつきました。そして、三井、高橋、川本、山本の呼びかけに応じ、続々と登録ヘルパーが集い、総勢12名になり、今年の4月に活動を開始することができました。

それではここでリアライズの歩んだ道のりと、私たちが活動する泉大津市を紹介します。

≪沿　革≫

2007年	内　容	2008年	内　容
4月27日	三井、ＮＰＯ法人リアライズの設立を決意	1月10日	ＮＰＯ法人格取得
4月28日	高橋、メンバーとして参加	2月25日	ヘルプセンター・リスペクト 居宅介護事業を申請
8月21日	ＮＰＯ法人リアライズ設立総会	3月21日	ヘルプセンター・リスペクト 居宅介護事業を4月1日付で指定取得
9月18日	ＮＰＯ法人リアライズ法人格認可申請	**4月1日**	**ＮＰＯ法人リアライズ** **自立生活センター・リトライ** **ヘルプセンター・リスペクト事業開始**
10月26日	川本、メンバーとして参加		
12月19日	山本、メンバーとして参加		

■　泉大津市の状況

泉大津市では、常時介助が必要な重度障害者が地域で自立生活を送るにはとても厳しい現状があります。

重度の障害者が自立生活をするためには、様々な社会資源が必要です。

しかし、泉大津市には重度障害者が自立生活を送るために必要な、相談体制、長時間の介助サービス(重度訪問介護等)を提供している事業所、日中活動の場など障害者の自立生活に必要な社会資源が少ないのです。そのため、重度障害者が泉大津市で自立生活を送ることは他の地域に比べ容易ではありませんでした。そこで、リアライズが重度訪問介護サービスを含めた介助派遣事業所（ヘルプセンター・リスペクト）を開所したことで、長時間の重度訪問介護と生活保護の他人介護料を併用することで、メンバーの川本が泉大津市で一人暮らしを実現し、泉大津市における重度障害者の自立生活モデル第一号となりました。

■ 大阪府のＰＴ案に対する取り組み

そして、現在、リアライズの緊急の取り組みとして、大阪府が今年の4月11日に発表した「財政再建プログラム試案」（ＰＴ案）があります。ＰＴ案では、府の今年度予算を１１００億円削減するとされ、その削減対象は府の単独施策全般に及んでおり、障害者の生活を支える非常に重要な施策も多く含まれています。このままでは、地域で自立生活を営むことが大変難しくなるため、リアライズも大阪府内の障害者団体と共にＰＴ案の見直しを要求しています。

■ これからの決意･･･

2007年4月、リアライズの設立を目指し、翼と2 人で活動を始めた頃を懐かしく思います。今は、常勤、非常勤のスタッフを含め 13人の仲間と、正会員さん、賛助会員さん、また寄付やカンパを下さった方々を合わせると、協力・応援してくださる方々が 100名を超えていました。100名もの方々に見守られていると思うと、感無量です。本当にありがとうございます。

それぞれ違う環境で育ったリアライズメンバー･･･。共通の目的のために行動し、前進する度ともに喜び、『仲間を大切に想い合う』という一番大切にしたい想いを確認するための衝突に涙することもありました。

リアライズでは、こんな素敵な想いのある仲間たちとともに、障害者の自立生活運動と自立支援を通して、どのような障害があっても、老若男女問わず、国籍や門地が違っても、地域で『ありのままの自分』に自信をもてるような生活を送れる･･･。そんな社会を実現していきたいと思っています。

しかし、その涙や行動をともにした時間が大きな糧となり、お互いわかり合い、想いあうことを再確認することができ、それが団結へと繋り、今の私たちを支えています。

『仲間がいるから強くも　優しくもなれるんだ。』

（By 自立さん生活夢宙センターにある色紙より）

皆さん、これからも私たちリアライズへの応援、よろしくお願いします。

作成者：川本＆ミッチー

リスペクトでは、リスペクト研修会の後にリトライを訪問してくれる当事者・ヘルパー・スタッフ。

交流会を開催しています！第2回研修会後も交流を深めました。

1回目のリスペクト研修の時に（第1回交流会☆ノープラン！！の報告は、次号にて！）、辻田さんから、ひと言・・・。

『なにも予定決めずに、のんびりと遊んでみたいですね！』

それじゃあ、**ノープラン**で遊びに行こう！！ということで、第2回研修会後に遊びに行くことになりました！

当日、研修会終了後、事務所からみんなでぞろぞろ歩き、泉大津駅近くの**泉大津CITY**に行きました。そこでは、なにやらショーが開催されていました。見てみると・・・。

何と！！**ドナルド**（マクドナルドのマスコットキャラクター）が子どもたちと写真をとっているのではないか？！

すかさずリアライズメンバー、ドナルドに駆け寄る！！先陣を切ったのが**川本将勝（23歳）**！！しかし、ドナルドはもう帰らないといけないらしく、**握手**だけしました。

川本将勝（23歳　2回目）、ショック！！(ToT)/~~~

昼になり、みんなでCITY内のとんかつ屋で食事をしました。みんなでワイワイガヤガヤおしゃべりしながら、楽しく食事をしました。その後、CITY内をそれぞれで散策しました。さぁ次はなにをしましょう？

NO PLAN 第2回 リアライズ 交流会!!

みんな考えるけれども、なかなか思いつきません。こういう時間があるのもノープランの楽しみですねぇ☆結局、代表の三井さんの家にいくことになりました。三井さんの自宅では、みんなそれぞれ寝る人もいれば好きなことしゃべったり、川本VS高橋のプロレス大会？！などをし、ゆっくりとした時間が流れました。みんなが帰ったのは終電の時間、この日は本当によくはしゃぎました☆　　作成者：ロッシー

リアライズファミリー☆紹介します！

三井 孝夫 ー MITSUI　TAKAO

リアライズ 理事長 ／自立生活センター・リトライ 代表

年齢：30歳 ／ 障害：骨形成不全症（通称ポキポキ病）

趣味：カーオーディオ、サングラス・香水集め

みなさん、こんにちは！リアライズの『身長100cm！小っちゃいオヤジ☆』 ミッチーこと三井孝夫です！

自立生活センターの設立…12年越しの夢が 2008年4月1日、ようやく実現（＝リアライズ）！！しかし、僕たちは泉州地域の障害者の自立と完全参加を構築するための“スタートライン”に立ったに過ぎません。これからは、僕たちの活動が少しでも多くの人をサポート出来るよう、リアライズを応援してくれている仲間への恩返しも兼ねて願生りたいと思います！！

（※ 願生る＝願いを持ち続け、『完璧な時の自分』の 100 ではなく、その日の力の100％で継続すること。）

川本 将勝 ー KAWAMOTO　MASAKATSU

自立生活センター・リトライ 研修生

生年月日：1985年3月23日

年齢：23歳　血液型：O型　障害名：脳性マヒ

趣味・特技：インターネット、チャット、料理

僕は、重度の障害があり 24時間介助を使って生活しています。

今年の 4月からリアライズのスタッフになるための研修中です。将来は正式なスタッフとして、どんな重度な障害がある方でも、地域で自分らしく生活を送れるようサポートしていけるように日々自分なりに頑張っているところです。（結構失敗をして周りに迷惑をかける事も多いですが…（苦笑）

こんな僕ですが、よろしくお願いします。

高橋　翼　－　TAKAHASHI　TSUBASA

リアライズ　理事　／ヘルプセンター・リスペクト管理者

年齢：30歳　／　障害：なし

趣味：読書

僕が介助という仕事に就いたきっかけは、障害を持つ知人に誘われたのがきっかけだった。最初は、お金を稼ぐためにという軽い気持ちだった。それが、仕事を通して実際に一人暮らしをしている障害者と出会っていく中で、この仕事にやりがいを感じるようになっていった。出会う機会を奪われてきた障害者と健常者。介助者として生活の一部分を障害者と共有していくことで、これまで自分が当たり前に思っていた、ものの見方や考え方が絶対ではなかったことに気づかされる。

介助という仕事に一人でも多くの人が携わることは、現在の社会を一人ひとりにとって生きやすいものへと変化させていくことに繋がると僕は信じている。

山本　啓司　－　YAMAMOTO　HIROSHI

ヘルプセンター・リスペクト　アテンダントスタッフ

年齢：24歳　／　障害：なし

趣味：レコード集め

初めまして山本啓司です。今年２月に以前働いていた職場を離れ、リアライズの活動に参加することを決めました。僕の地元でもある泉大津を拠点として活動するにあたっての目標はズバリ、「泉大津を誰もが暮らしやすい地域」にすることです。川本君の家探しに同行することで、泉大津は障害者に閉鎖的であるということを実感させられました。「障害があろうとなかろうと、そんなん関係ないやろ！」という感情が自分の中で湧き上がってきました。そうしなければいつまでたっても泉大津は障害者の生き難い地域のままです。街に生きる障害者の姿をもっともっと地域の人に見てもらい、理解してもらうことが、まず初めの１歩だと思っています。そのきっかけを作るのがリアライズだと思っています。活動をするにあたって不安はどこまでもついてきます。しかしそのようなきっかけ作りに参加できることへの期待の方が何倍も大きいです。仕事を辞めリアライズに参加しようかどうかはかなり悩みました。しかし、今リアライズの活動に参加すると決めた判断は間違っていなかったと日々感じています。リアライズで活動することが自分の目標の実現（＝リアライズ）になると信じています。

『シリーズ☆重度障害者が泉大津市にやってきた！！Ｖｏｌ.1』

暴れん坊☆将Kun！

作成者：川本 将勝

僕は、もともと大阪市民で大阪市から離れたことがありませんでした。転居するまでは大阪市営住宅の車椅子対応住宅で自立生活をしていました。

しかし、2007年10月に「リアライズの活動を一緒にやらないか？」と三井代表から誘いを受けました。そこで、僕は自分の役割とはなんだろうと考えた結果、現在、自立生活をしている重度障害者のいない地域である泉大津市に転居し、ロールモデルになることだ、と思いました。そして、泉大津市を含む泉州地域が少しでも障害当事者が生活しやすい地域にしたいと思い、僕の新たなチャレンジが始まりました。（想いだけは一人前～！）

物件探し！！

本格的に物件探しを始めたのは、2008年2月初旬からです。当初、僕の感覚としては大阪市とあまり変わらないのでは？という考えでした。しかし、実際には、そう甘くはなく、賃貸契約直前で家主からの障害を理由にした入居拒否が2件続きました。そうこうするうちに 2月が終わり、3月になってしまいました。4月から泉大津市での自立生活をスタートする予定だったので、焦る気持ちはありましたが、物件探しに関してはある程度不動産屋さんに任せるしかなく、一週間ほどは自分ではなすすべもない日々が続きました。そして最終的に物件は見つかりましたが、長屋の文化住宅という、僕としてはまったく想定外の物件に転居することになりました。（大阪市の市営住宅を出たことに、少し後悔･･･（笑））

しかし、物件探しでは、不動産業者の方が、物件探しに奔走してくれ、入居拒否にも共に憤り、物件が決まったときには一緒になって喜んでくれたことが嬉しかったです。今ではレトロな長屋もお気に入りのマイホームです。

障害者自立支援法介護給付関係

僕の場合は重度訪問介護【障害程度区分４以上で長時間の介助が必要な障害者が受けられる介護サービス】でヘルパー制度を利用していたため、大阪市で決定を受けた障害程度区分6【障害福祉サービスを受けるためには、市町村から障害程度区分の認定を受ける必要があります。】をベースに、非定型の時間数【障害程度区分ごとに基準時間が設定されていますが、それを超える介助が必要な場合は、定型外という形で審査会が行われ、

支給決定時間が決まります。】のサービス利用計画案・ウィークリープラン【1週間の介助予定表】を泉大津市役所障害福祉課に申請しました。

しかし、審査会は月に1回しか開かれていないにもかかわらず、僕は申請すること自体を忘れてしまい、2月に提出する予定が3月にずれ込むという最悪な事態になってしまいました。そのために当初、希望していたサービス利用計画案の必要時間数の半分程度しか認めないという審査会の意見に基づいて、その支給決定のまま 4月を迎えざるを得ないところでした。しかし、リアライズと泉大津市役所障害福祉課担当による話し合いにより、ほぼケアプラン通り 561時間（内移動93時間）を確保できました。

重度障害者住宅改造助成制度関係

実際、物件を見つけるのが遅くなったことと、原則住民票のある所在地でしか住宅改造ができないとのことで、転居後すぐに申請を出し、受理されると同時に着工しました。その後、約1週間で改修が終わりました。【泉大津市では上限５０万円。生活保護及び前年度所得税が非課税の世帯は全額、８万円以下は３分の２、８万円を越え１４万円以下の世帯は２分の１が助成されます。日常生活において、重度障害者の在宅生活の支援や、介助者の負担軽減を図るため、現在居住する住宅を改修する場合に、その費用を助成する事業です。借家でも家主の承諾があれば可。】

生活保護関係

初めに泉大津市役所に転入をする旨を伝えました。その後、直接協議しようとしましが、生活保護の性質上、「協議窓口は現居住地の大阪市住吉区でお願いします」と言われました。住吉区の担当者に「家賃補助の特別加算等を大阪市と同等の基準で支給してほしい。」と伝えましたが、大阪市の担当者から泉大津市への連絡がうまくいかず、結局、泉大津市の担当者からは、「障害者の加算一般基準の 42,000円です。」と言われ、大阪市から連絡を入れてもらうことになりました。二重に連絡をしなければならず、とても疲れました。最終的には大阪市と同等の基準が支給されることになり、少し安心しました。

その他の手続き

電気・ガス・水道・携帯電話・インターネットの住所変更の手続きを転居前にしました。全て電話で住所変更ができるものばかりでした。転居前の自宅については、何の問題もなく電気・ガス・水道を止めることができました。しかし、転居先については、軒続きの長屋の住所が全て同じ番地だったため、僕と同じ住所が10棟はあり、まだ1回しか新居に行ったことがなかったので、場所を伝えることができず、家の場所を特定するのに時間がかかりました。

現在の生活

現在は、事務所から徒歩10分のところに家があります。リアライズでは週3回程度、活動しています。家での生活は、思ったよりも良く、満足しています。

（余談）転居をしたおかげで、今まではあまりしていなかった調理を週3～4回ペースでするようになりました。そのためか、少し太ったような気がします（笑）

（次号へ続く・・・）

記念 第1回リスペクト研修会報告

今回初めてということもあり、何人くるのだろうとドキドキしていましたが、なんと11人もの人が集まってくれました。

リアライズでは、研修会とセットで交流会をしていきたいと思っています☆

開催日時：2008年3月27日13：00～17：00

場　　所：リアライズ事務所

- 『自立生活運動の歴史』（ＤＶＤ上映）
- 障害当事者からの声（Ⅰ）　講師：三井孝夫
- 『人生を変える、社会を変える』～自立生活センターの活動～（ＤＶＤ上映）
- 障害当事者からの声（Ⅱ）　講師：辻田奈々子さん
- 自立生活センターにおける介助者の役割　講師：杉井健祐さん　（ヘルプセンター・あるる）
- 感想・まとめ

では、記念すべき研修会の様子を報告したいと思います！

ミッチーの話は・・・・長いのでカットするとして・・・（笑）（※　ＮＰＯ法人リアライズの軌跡とほぼ同じ内容です。）

～第1部～

テーマ：『介助サービスの必要性』

講　師：辻田奈々子さん（桃山学院大学社会福祉学科2回生）

第１部では障害当事者である辻田奈々子さんを講師としてお迎えました。

辻田さんは現在家族と同居されていますが、近い将来、一人暮らしをしようと思われています。自立生活の第１歩として重度障害者を対象とした介助サービス（重度訪問介護）を利用したいという希望を持っておられ、今回サービス

を申請することになりました。サービスを利用するためには居住の市町村に申請が必要です。その後、認定調査を受け、認定審査会で審査され、そこで決められた障害程度区分に基づいて支給時間数を決定され、その時間数の中でサービスを利用することができます。

しかし、そこでは、障害当事者本人が直接意見を言う場がなく、どうしても本人の考え抜きでサービスが決められてしまいがちという現状があります。そのため、自立生活への想いを文章にして、審査会に届けました。

その想いのこもった文章を原文のまま掲載させてもらいました。（辻田さんは快諾してくれました☆）

重度訪問介護の申請理由について

辻田 奈々子

私には先天性の骨形成不全症という障害があり、上肢下肢共に重度の障害があります。骨形成不全症の特徴としては全身の骨が著しく弱いため、ちょっとした衝撃や圧迫・疲労等で折れやすいことです。軽度か重度かではＡＤＬ面で大きな違いがありますが、私の場合歩行はもちろん、立つことも出来ない重度となります。そのため日常生活のあらゆる面で不自由さを感じ、風呂や排泄に関しては全介助が必要です。骨折をした場合は、激しい痛みを伴い、安静にしなければならないため、より多くの介助が必要となります。

今の所、自宅での介助は主に母と祖母にしてもらっていますが、年を取るにつれ体力的に厳しくなり、私自身も昔に比べ身体が成長(体重の増加など)しているので、介助をする側・受ける側共に怪我を負う危険性や心身の疲労が大きくなってきているように感じます。また、大学へと進学した今、通学における家族の負担もこれまでに比べより一層重くなり、仕事の合間を縫って日々、車で大学へと送迎をしてくれる母には、感謝の気持ちだけではなく、申し訳ないという思いさえ感じてしまうこともあります。普段の余暇活動に関しても、母の都合によって外出ができないなど、本来楽しむべき大学生活にさまざまな制限が掛かっていることも確かです。母や祖母も、私の介助を常時しなければならないため、自由に出掛けたり、自分だけの時間を過ごすということが難しい状態です。

このように、重度の障害者がヘルパーなしで生活するということは、本人だけではなく、それを支える家族にも時間的・行動的な制限が掛かってしまうのです。私が今回重度訪問介護の申請を決めたのは、以上のように家族の負担を少しでも減らし、自分らしい生活を送りたいという思いからです。今は何とか健在でいる母や祖母ですが、何らかの病気や怪我を負えば私の生活は成り立たなくなります。そうではなくても、いつか訪れる親亡き後の生活を考え、自立をすることは健常者・

障害者関係なく誰もが必要なことであります。万が一の場合、施設という道もあるでしょう。しかし、施設は当事者にとって決して居心地の良い場所ではありません。施設での暮らしは非常に閉鎖的且つ劣悪で、私の場合大学で学ぶことや友人と触れ合うこと、将来の夢など全てを諦めなければなりません。新たな出会いもなく一生を過ごす可能性だって考えられます。家族の病気や死はいつ訪れるのか分かりません。今日明日になることだってあるのです。なので、施設での暮らしという最悪の事態を避け、家族にこれ以上の負担や心配を掛けないために、ヘルパーの利用は急がれることであり、少しでも早く自分のライフスタイルを確立しなければならないと考えております。

以上が今回、私が重度訪問介護の申請をする理由です。今はとりあえず家族と同居しながらのヘルパー利用を考えていますが、先述したように将来的には一人暮らし、つまり完全に家族と離れて暮らすことも考えています。利用に当たっては、私だけではなく家族も自分だけの自由な時間を持てるよう、より多くの時間数を得られればと思います。

また、現状では通学においての制度利用が認められてないですが、通学時の制度が利用できるようになることも切に願っております。

最後に、一住民の個人的なニーズであると思われるかもしれませんが、今後熊取町に住んでいる方の中に私と同じようなニーズを持っていたり、またはそれ以上の支援が必要な方が現れても決して不思議ではありません。その人たちが地域で豊かな生活を送れるためにも、どうか私のニーズをこれからの福祉行政に反映させてもらえればと思います。

～第2部～

テーマ:『介助者として一緒に考えてもらいたいこと』

講　師:杉井健祐さん（ヘルプセンター・あるる）

さて、第2部の研修ではヘルプセンター・あるるのコーディネーター（介助派遣の調整や、相談に乗る人）である杉井健祐さんです。杉井さんも大阪市都島区にある自立生活センター・あるるを障害当事者とともに立ち上げたメンバーの一人です。

杉井さんの講義のポイントを抜粋し、まとめました。

当たり前に行われる変なこと

僕が以前働いていた入所施設では異性介助が行われ、性が置き去りにされていました。そこでは援助者主体の決まりきった生活を入所者に強いられていました。

例えば、人員不足のための効率化

・ 女性のお風呂介助、トイレ介助で男性の職員が介助すること。

・ お風呂介助の際、少ない職員で何十人もの利用者にはいってもらうので、お風呂場にみんな集められ、長い行列ができ、脱衣場では裸の状態で行列ができる。

麻痺する価値観

そんなことが日常的に起こっていました。それは当然おかしいことですが、そのようなことにも慣れてしまうことで、介助者、利用者がお互いに『それはおかしい！』という感情が段々と麻痺していきます。『こんな介助を行って良いのか！？』自分自身、葛藤や矛盾を感じ、とても精神的に疲れていました。そして施設を変えていくにはどうすれば良いのだろうと思うようになっていきました。

施設を変えるために地域を変える

地域では、重度障害者が自立生活するために必要な環境や、基盤少ないため、サービスを使えずに、親に援助を受け、親亡き後の選択肢がなく、施設入所を選らばざるを得ない状態があります。それを解決するためは、地域を変えなくてはならない。そう思い、地域の自立生活センターで働くようになりました。

ヘルパーという立場

自立生活センターのヘルパーとして、理解してほしいことがあります。それはヘルパーの価値観が利用者に与えてしまう影響です。ヘルパーが良かれと思って言ったことが、利用者の選択肢を狭めてしまう。必ずしも自分の価値観を抑える必要はないが、前提として、自分の発言が利用者にどういう影響を与えてしまうかを考えて欲しいと思います。またそうすることで利用者との関係性もよくなると思います。

ヘルパーという仕事

決して楽しいことばかりの仕事ではありません。ときには、いろんな悩みや葛藤をしながら進んでいくものです。しかし、悩みや葛藤は力をつける材料になります。そして一人で悩みを抱えこまず、そのときには自分一人じゃない、仲間がいるんだということを忘れないでください。

★辻田さん・杉井さんの講義をきいて…　＝リスペクトスタッフ、ロッシーこと山本の感想＝

2人の話を聴いて自分がその立場だったなら・・・と考えると社会の仕組みがおかしいと感じざるを得ません。人は失敗を繰り返し、経験を積み、理想の姿に近づいていくもので、誰であってもそう思える環境があるべきだと思います。

『施設がなくならないのは、地域での環境が整備されていないからである』ということを考えなくてはならないと思いました。『環境の整備が遅れていることが障害者の人権を侵害してしてる。』と、いうことを改めて考えるきっかけになりました。介助者は利用者に対し自己決定の機会を奪ってしまう立場にいることを忘れてはならない。しかしそれを過剰に意識しすぎて相手に遠慮すると、かえって関係がギクシャクしてしまうのではないかなと思いました。

作成者：ロッシー・山本

激白!? 第2回リスペクト研修会報告

取り戻せ!! 川本少年の奪われしモノ

研修会の報告が続きますが・・・・。

まず研修では、リアライズの暴れん坊こと、川本将勝が自らの生い立ちについて語りました。 小さい頃の環境が、川本にどのような影響を与えたのか・・・。

■ 幼少期

僕は、1985年3月23日阪神タイガース優勝の年に生まれました。

両親は、父が在日韓国朝鮮人、母が韓国人でした。僕は未熟児として生まれ、脳性マヒという障害がありました。5歳のときに両親が離婚し、母親と5歳ちがいの姉との3人で生活をしていました。幼稚園には行かず、「あさしお園」という肢体不自由児通園施設に通い、毎日、保育とリハビリを受けていました。

その当時の僕は、同じく通園していた周囲の重度心身障害児に対して、どう接していいのかわからなかったため、大人とばかり接してしまっていました。小学校入学前に就学時検診で、ＡＤＬ（日常生活動作）的に地域の学校に入学することが不可能と判断され、大阪市立平野養護学校へ入学しました。

■ 養護学校時代【小学校1～4年生】

平野養護学校は、主に肢体不自由児が通っている学校でした。健常児とは、日常的にはまったく関わりがなく、年に一回の交流会で、数時間程度、顔を合わせるくらいでした。

■ 地域の学校に通っていた小学、中学時代 【小学校5年～中学校 3年生】

そんな僕が地域の健常児と共に過ごせるようになったのは、小学校5年生になってからでした。そのきっかけは、養護学校の先生が、「知的にも障害がなく、脳性マヒとしては珍しく言語障害がなかった川本は養護学校にいるのはもったいない」と言われ、母親の希望もあり、地域の学校に働きかけて、転入することになりました。この言動の背景には、知的障害児は養護学校に行くのが当たり前だ、という差別的な考え方があるんだろうなぁと思います。

しかし、これまでまったく健常児と関わりがなかった僕は、接し方がわからず、声をかけることもできず、一人で過ごしていました。周囲から一人浮いている状況で、いじめの対象となり、次第に仮病を使って学校にも行かなくなりました。

そして、中学も地域の学校に進学しましたが、状況は変わらず、不登校状態が続きました。家ではゲームばかりをし、部屋に引きこもっていました。高校は一般校を希望しましたが、勉強を全くしていなかったため、学力面での問題や、親と教師が養護学校を勧めたため、仕方なく平野養護学校高等部に進みました。

■ 再び養護学校へ…【～高校卒業】

高等部では、年全体でAからDグループの4つに学力別で振り分けられ、知的な障害のない僕はDグループで学びました。学校へは、給食を食べに行ったり、大便をしに行ったり（体が大きくなり、母親が介助できなくなってきたため）するためだけに行っていました。

僕が養護学校高等部に行って唯一よかったと思えることは、重度心身障害者の人たちの存在が身近に感じられるようになったことです。卒業後の生活は、作業所に入ることを拒否し、毎日ひたすらに人権関係の講座に顔を出し、仲間探しと自分の居場所を探し求めていました。

（名コンビ！？川本＆ロッシー in 府庁前）

■ 最後に…【現在】

今振り返ってみると、僕は幼少期にあさしお園、平野養護学校で障害児と健常児と分けられて育ってきました。そのことにより、僕自身たくさんの経験を奪われました。僕は、協調性をいまだに見出せないときがあり、そのために周りの人たちに知らない間に迷惑をかけてしまうことがあります。また、スケジュール管理や金銭管理も同様に苦手です。

なぜ、今回このような話をしたのかというと、僕が経験を奪われてきたという実体験を通じて、他の障害者も多かれ少なかれ経験を奪われてきていることをみんなに伝え、僕自身、奪われたコミュニケーションの経験を取り戻すための第一歩として、ヘルパーのみなさんと一緒に考えてみたかったからです。

今後の目標・・・

ロールモデルになる！！そして、事務局長の座を狙う！！

作成者：川本将勝

特定非営利活動法人 リアライズ

リアルライフNEWS

目　次

■ NPO法人リアライズの軌跡（P.2-4）

■ 第2回交流会報告！（P.5）

■ リアライズファミリー☆紹介します(P.6-9)

（Web 版では手書きページのため準備中です）

■ 暴れん坊☆将kun(P.10-11)

■ 第1回リスペクト研修会報告(P.11-15)

■ 第2回リスペクト研修会報告(P.16-17)

■ もくじ・編集後記(P.18)

編集後記

今回初めて通信を作り、血と汗と涙をかけて作りました。文章作成の苦手な僕からしてみると本当に大変な作業でした。最初は、「通信なんて簡単や～！」と思っていましたが、実際、作ってみると思っていた以上に大変で、何回も挫折しそうになりましたが、その度にリアライズを応援してくれる皆さんに読んでもらいたいという一心で作りました。そして完成し、皆さんの手元に届けることができ、本当に嬉しいです。これからもっとたくさんの情報を発信していきたいと思いますので、今後ともよろしくお願い致します。

by 川本

たいへんお待たせしました。通信が完成したときには、ホッとした反面、首を長くしてお待ちいただいた方々に申し訳ないという気持でいっぱいだったのを覚えています。原稿を作るのがうまく進まず、時間だけが刻一刻と過ぎていきました。事務所に夜遅くまで残りながら、なんとか完成に至りました。リアライズの「進む道」を皆様と共に歩んでいきたいと思います。

by ロッシー・山本

≪発 行 人≫

特定非営利活動法人 リアライズ

〒595-0071 大阪府泉大津市助松町１－３－３３

エクセラート北助松1階 店舗4

TEL：0725-22-7716／FAX：0725-22-7746

URL：http://www012.upp.so-net.ne.jp/Realize/